

登場人物

高室 叶子（たかむろ かなこ）女。

みなさん、こんにちは。私の名前は、高室叶子です。初めまして、どうも。今日は、私に起こった不思議な出来事について、お話ししたいと思います。

その日、私はバスに乗っていました。行先はとある病院です。前日の夜に、突然母から電話があったんです。

「もしもし、お母さん？どうしたの？……え、おばあちゃんが？うん、それで……市民病院ね、うん、うん……わかった。じゃあ、明日行くね」

母からの電話は、祖母が倒れたという連絡でした。そして、私は翌日、祖母が入院している病院へ向かいました。

その日は朝から小雨が降っていました。祖母の入院している病院は、少し駅から離れていたのですが、私はバスに乗ったんです。母からのラインには、駅からはバスで15分くらい、と書かれています。

バス停を2つほど過ぎたあたりで、私は眠くなってきてしまいました。昨晚はあまり眠れず、睡眠不足だったんです。バスに揺られながらウトウトしていると、突然、車のクラクションの音が聞こえました。びっくりして目を覚ますと、目の前にまぶしい光が見えました。あまりのまぶしさに私は目を閉じました。そして再び目を開けると、そこは、のど自慢大会の会場だったんです。

「それでは、決勝に進出されたお二人を紹介します！まず一人目は、高室叶子さん！」

私の目の前には、大勢のお客さんがいて、みんなが私のことを見ていました。野外のステージで、開放感があつてとっても気持ちのいい場所でした。司会者が私を紹介してくれて、私は、対戦相手は一体どんな人なんだろうってドキドキしていました。

「では、もう一人を紹介します！高室艶子（つやこ）さん！」

高室艶子！？その名前を聞いて、私はびっくりしました。だって、それは私のおばあちゃんの名前だったからです。カラオケが趣味だって話は聞いたことがないし、もしかして

同じ名前の知らない人かも……と思っていたら、ステージの反対側から現れたのは、おばあちゃんでした。

おばあちゃんは真っ赤なドレスを着て、肩には白いホワホワの、成人式に着物の上から羽織るやつみたいなものを巻いていました。え？そりゃ、もちろん私だって素敵なドレスを着てましたよ、ピンク色で、テカテカしてるやつ。でも、白いホワホワは巻いてませんでしたけど。続き、いつでもいいですか？どうも。

出場者の紹介が終わったところで、司会者がこう言いました。

「では、早速歌っていただきましょう。叶子さん、こちらへどうぞー！」

私はステージの中央に進んでいきました。ステージの下には生バンドがいて、指揮者がタクトを振りしました。すると、私が歌う曲のイントロが流れてきました。私は精一杯歌いました。持てる全ての力を出し切ったと、自信をもって言えます。これで負けるなら、悔いは無い。歌い終わったとき、そう思いました……。はい？何を歌ったかって？それは、秘密です。みなさんのご想像にお任せします。

「叶子さん、ありがとうございます。それでは、艶子さん、こちらへどうぞー！」

私が出ると、おばあちゃんがステージの中央へ歩いてきました。見るからに、私とは貫禄が違いました。あの瞬間、私は自分の敗北を悟りました。歌も聞いていないのに？ええ、そうです、歌も聞いていないのに、です。おばあちゃんにはオーラがありました。今までおばあちゃんが生きてきた人生そのものが、彼女を包み込んでいるみたいでした。

そして、おばあちゃんが歌いられました。私は、涙を流していました。客席にも、私と同じように泣いている人が何人もいました。それくらい、おばあちゃんの歌はすごかったです。何を歌ったかは、そうです、秘密です。

「お二人とも、ありがとうございます。この対決、一体どちらに軍配が上がるのでしょうか？」

お客さんの拍手が多い方が勝ち、と言うルールでした。

「さあ、結果は……勝ったのは、艶子さん！高室艶子さんです……！」

結果は一目瞭然でした。「おばあちゃん、おめでとう」私はそう言いました。「ありがとう、かなちゃん」おばあちゃんはそう言うと、私を抱きしめてくれました。

「では、優勝した艶子さんには、天国へ行ってもらいます！みなさん、盛大な拍手でお見送り下さい！」

司会者は唐突にそう言いました。私は混乱しました。「ちょっと、それ、どういうことですか？！」と司会者に聞きました、すると彼は「そういう決まりです」と言いました。私はおばあちゃんに、「どういうことなの？」と聞きました。すると、おばあちゃんは、

「この時を待ってたのよ」

と、言いました。「どういう意味？」と私が聞くと、

「だっておばあちゃん不良だから、普通に死んだら絶対、地獄だもん」

「なにそれ？！」

「どうせ行くなら、天国の方がいいじゃない」

おばあちゃんはそう言って笑いました。そして、気が付くと、なんとおばあちゃんの身体は空中に浮いていました。そして、そのままどんどん上の方に行ってしまうんです。

「待って、おばあちゃん！ちょっと！みんなも拍手するの止めて！おばあちゃん！行かないでー！」

「じゃあね、かなちゃん」

「待って、おばあちゃん！」

私は叫びました。でも、おばあちゃんはどんどんどんどん高い所へ行ってしまいます。遮るものがないのもう、空の星みたいになってしまいました。

「あと、よろしくね」

「待ってよ！！！」

とうとうおばあちゃんの姿は見えなくなってしまうました。私は司会者に言いました。

「私が上まで行って、おばあちゃんを連れ戻してくる」

けれど、司会者は「それはできません」と言いました。「負けたあなたは、天国に行くことはできません」と。そして。

「あなたは、まだ行くべきではないと言うことです」

その瞬間に、私は目を覚ましました。そこは、どうらや病院のベッドの上らしく、私はそこに寝ていました。全身にひどい痛みを感じました。そうです、私の乗っていたバスが事故に遭ったんです。母から、私は半日眠っていたと聞きました。そして、その間に、おばあちゃんは息を引き取っていました。

後で、父にこの時の話をしたら、おばあちゃんの子どもの頃の夢は、歌手になることだったそうです。もしかしたら、それであんなに歌が上手だったのかもしれない。

今、私は、歌を歌うことを仕事にしています。私が歌で生きていきたいと言った時、父も母も、兄弟も反対しました。けれど、おばあちゃんだけは応援してくれました。

正直なところ、実は、また、あのほど自慢大会に出たいと思っています。私もきつと、死んだら地獄ですから、そうなる、もう二度とおばあちゃんとは会えないことになりません。それはちょっと寂しいので、なんと少しでも天国に行きたいのです。

それまでは、私のことを見守っていてね、おばあちゃん。